

# 景色と郷土教育にみる 「近くて遠い島」 金門島の独自性

帝京大学外国語学部教授 山崎 直也

## はじめに

台湾の主要な「離島」の一つである金門群島は、金門本島、列嶼、大膽島、二膽島等、12の島嶼によって構成される。行政院ウェブサイトの「国情簡介」によれば、面積は約150.46平方キロメートル、台湾島の高雄から約150海里（277.8キロメートル）の距離があるのに対し、中国大陸からは最も近いところでわずか2,300メートルしか離れていない<sup>1</sup>。一般に小金門と呼ばれる列嶼の上林海岸からは、外敵の上陸を阻止するために設置された無数の鉄杭越しに中国福建省の港湾都市廈門（アモイ）の高層ビル群が間近に見える（写真1）。金門本島の水頭の港から廈門の五通埠頭までは船で約30分と確かに近いが、台湾島からの移動もさほど不便ということではなく、台湾島の各空港（台北、高雄、台中、嘉義、台南）からかなりの数の定期便が運航している。特に便数が多い台北松山空港からの飛行時間は1時間5分から20分であり、例えば、羽田―秋田間のフライト時間とさほど変わらない。日本の空港を午前の便で出れば、その日の午後には金門島に着くことができるが、「離島」という言葉が醸し出す心理的距離感もあってか、一般の観光客はもちろん、台湾を専門とする研究者であっても、この島に足を運んだことがない人は少なからずいる。かく言う筆者も、1996年に大学4年生で初めて台湾を訪れ、その後、大学院に進んで台湾を研究するようになってからは、年数回台湾に行くのが常となったが、金門島を最初に訪れたのは2019年のことであり、実に20年以上の月日が流れていた。しかも、それは台湾研究者としての内在的な問題

意識に導かれてのことではなく、国境・境界地域の教育に着目する比較教育学の共同研究のメンバーになるという外在的要因による部分が大きかったのであり、金門島はまさに「近くて遠い島」であった。

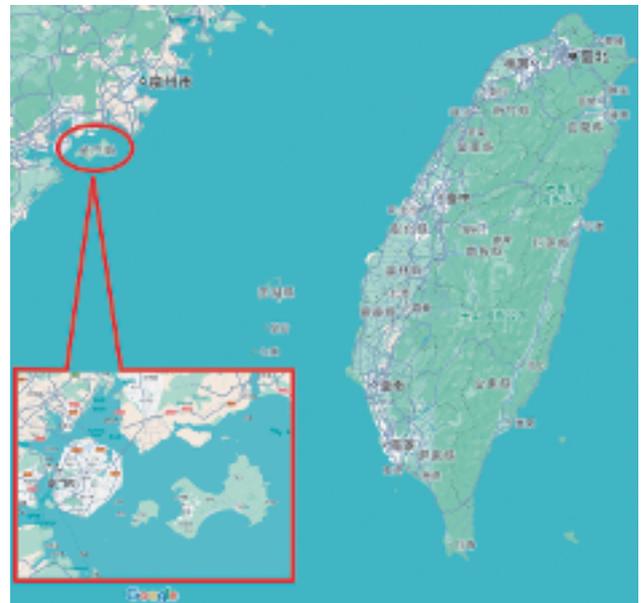


図1 金門島地図（Google マップより）



写真1 上林海岸から廈門市街を望む（筆者撮影）

1 「国情簡介:土地」、行政院ウェブサイト、2024年3月29日、<<https://www.ey.gov.tw/state/4447F4A951A1EC45/094b1d53-de8d-4393-bde6-ab092969cce4>>、2025年2月24日閲覧。以下、本稿のウェブサイト閲覧日は、特に断りがない限り、すべて2025年2月24日である。

しかし、実際に金門島に足を踏み入れてみて、これまで台湾島で得た知見を基に築いてきた台湾認識が揺らぐような衝撃を受けた。金門島に対する関心は完全に内在的なものとなり、この島を繰り返し訪れるようになった。日本では、いわゆる「台湾有事」の議論の中で「最前線」として注目されることが多い金門島だが、その一面のみを見て済ますには惜しい独自の歴史と豊かな文化があり、台湾島ではおよそ目にする事のない光景や耳にすることのないナラティブ（語り）がある。筆者は、2019年以来、何度も金門島を訪れているが、来る度ごとに新たな発見があり、「台湾」及び「中国」とこの島の複雑な関係について常に考えさせられている。ここで「台湾」と「中国」を括弧で括っているのは、前者が狭義の台湾としての台湾島と広義の台湾としての台澎金馬=1949年以降の中華民国政府の実効支配地域という二重の意味、後者が政治的実体としての中華人民共和国、台湾島と澎湖島を欠く形で1912年に成立し、1945年に日本の敗戦によって一度は台湾海峡兩岸に実効支配を広げたものの、国共内戦によって1949年に大陸を失った中華民国、さらには政治的実体ではなく文化的共同体としての中国と三重の意味を持つためである。金門島に限らず、我々は台湾を知り、台湾について考える時、ともすれば離島の存在を意識の外に置きがちだが、この近くて遠い境界の島を知ること、台湾理解の解像度を高めることができるだろう。本稿では、筆者が金門島で目にした印象的な光景と現場で見聞した郷土教育に触れながら、この近くて遠い島の一端を読者に紹介したい。

## 国立金門大学「壽與國同」の碑

2019年に初めて金門島を訪れた筆者の第一の目的地は、国立金門大学であった。国際暨大陸事務処で海外からの学生受け入れや中国との教育学术交流について話を聞いた後、案内を受けてキャ

ンパス内を見て回ったが、金門島と列嶼をかたどったモニュメントが印象に残った。それは、2011年の中華民国建国百年を記念して建てられたもので、表には当時総統を務めていた馬英九の手による「壽與國同」の四文字が大きく刻まれている（写真2）。「国とともにあることを寿ぐ」という言葉が象徴しているのは、中華民国の建国から百年間、この島が常にその一部であり続けたという事実である。台湾島と澎湖島は1895年から約50年間、日本の植民統治下におかれていたし、中国大陸は1949年以降、中華人民共和国政府が実効支配している。金門島と馬祖島だけが一貫して中華民国の一部を構成してきたということは、もちろん知識としては知っていたが、それがモニュメントという形をとまなうモノとして、大学という空間に設置されていることに驚いた。



写真2 国立金門大学の「壽與國同」の碑（筆者撮影）

## 洋楼と街の景観

金門島では洋楼と呼ばれる瀟洒な建物をいたるところで目にする。1921年竣工の陳景蘭洋楼<sup>2</sup>のように現在も保存・活用されているものもあれば、手入れをする者もなく、朽ちるがまま廃屋と化しているものもある。金門島にかつて存在した軍営の娯館「特約茶室」をめぐる男女の群像を描いた映画『軍中樂園』（2014年）のロケで使用され、

2 陳景蘭洋楼については、上水流久彦「陳景蘭洋楼—華僑の故郷金門について学べる洋風建築」、『みんなの台湾修学旅行ナビ』、2022年1月9日、SNET台湾、<[https://taiwan-shugakuryoko.jp/spot\\_island/2433/](https://taiwan-shugakuryoko.jp/spot_island/2433/)>を参照のこと。

日本で翻訳出版された『台湾名建築めぐり』<sup>3</sup>の表紙にも登場する陳清吉洋楼も、現在は後者の状態だ。これらの洋楼は、主に1910年代から20年代にかけて、金門島から海外、特に東南アジア諸国に移民し、成功を収めた者がそれぞれの故郷に建てたものである。建物ごとに異なる顔を持つが、総じて言えば、その施主が移民先のシンガポールやマレーシアで目にした南洋風のコロニアル建築が手本となっている。華僑の故郷、即ち、「僑郷」<sup>4</sup>である金門島に散在する洋楼は、台湾島で目にする「日式」の洋風建築とは意匠、工法、建材など、多くの点で趣が異なる。これに加えて、金門島には、燕の尾や馬の鞍のような形の屋根が特徴的な閩南伝統建築の家屋が数多く存在し、地元の人々の住居や観光客が気軽に宿泊できる古民家民宿として使用されている。また、台湾島の都市部に見られる高層建築もほとんど存在しないため、景観全体が台湾島とは大きく異なっている。

## 「兩岸共飲一江水」の碑

筆者が金門島の各所を見て回る中で最も驚いたのは、2024年3月の調査の際に目にした一つの石碑である(写真3)。中国から供給される水の貯水池の脇に立つ石碑には、「兩岸共飲一江水(兩岸の人々は共に1本の川の水を飲む)」と刻まれている。この「兩岸」が台湾海峡兩岸、即ち、中華人民共和国と中華民国(台澎金馬)ではなく、金門島と対岸の中国福建省という限定的な空間を指すとしても、台湾島ではおよそ目にするのではないであろう言葉に強い衝撃を受けた。

「兩岸共飲一江水」の碑は、金門島の人々の生活がその根本において中華人民共和国に依存していることを表しているが、地元紙の『金門日報』に報



写真3 「兩岸共飲一江水」の碑(筆者撮影)

じられ、県政府のウェブサイトにも転載されて話題を呼んだ模範街のある「奇観」をめぐる挿話は、この島と中国との微妙な距離感を象徴するものであった<sup>5</sup>。模範街は金門島で最も繁華な金城鎮にある通りで、観光名所にもなっている。大正時代の日本の街並みをモデルにしたという模範街の、道の両側がレンガ造りのアーケードを成す構造は、台湾島では広く見られるものだが、金門島では他に類を見ない。筆者は2019年1月に初めてこの場所を訪れ、件の「奇観」を目にした。それは、道の片側に中華民国の青天白日旗、もう片側に中華人民共和国の五星紅旗が立ち並ぶという光景であった(写真4)。台湾島で五星紅旗を目にするのはまずないため、この光景に驚いたが、2020年2月に再びここを訪れた際には五星紅旗が姿を消し、両側に青天白日旗が立てられていた。先の記事によれば、模範街の五星紅旗はもともと、陶芸家の王宗明という人物の発案であり、「文創」<sup>6</sup>の観点から、模範街を人気のSNS映えスポットにして地元にも商機をもたら

3 老屋顔(辛永勝・楊朝景)著、小栗山智訳『台湾名建築めぐり』エクスマレッジ、2019年。

4 金門島が「僑郷」となる歴史的過程については、川島真「僑郷としての金門—歴史的背景」、『地域研究』第11巻第1号、2011年、43-61頁に詳しい。

5 「国旗 vs. 五星旗 兩岸国旗模範街齊飄揚」、『金門県政府ウェブサイト』、2018年1月2日、<[https://www.kinmen.gov.tw/News\\_Content2.aspx?n=98E3CA7358C89100&sms=BF7D6D478B935644&s=03C997D8EF8D507B&Create=1](https://www.kinmen.gov.tw/News_Content2.aspx?n=98E3CA7358C89100&sms=BF7D6D478B935644&s=03C997D8EF8D507B&Create=1)>。

6 近年、台湾で重要なキーワードとなっている「文創」については、上水流久彦「文創」、『みんなの台湾辞典』、2024年12月28日、SNET台湾、<<https://taiwan-shugakuryoko.jp/dictionary/3598/>>を参照のこと。

そうとの考えで2018年の元日に設置された。これは金門でも一種の奇策と捉えられ、議論を呼んだが、狙い通り中国からの観光客の人気を集めた。2020年の再訪で五星紅旗が消えていたのは、2019年の年末に撤去されたため、これは当時立法院で「反浸透法」<sup>7</sup>の成立が見込まれていたためである。同法は、第1条で立法の主旨を「域外敵対勢力による浸透・関与を防ぎ、国家の安全と社会の安定を確保し、中華民国の主権及び自由民主の憲政秩序を擁護するため」としているが、「域外敵対勢力」の意味するところは明白である。立法院での同法の成立を見越して、王宗明氏と模範街がある里（行政区画の一つ）で里長を務める蔡祥坤氏は、2019年12月31日に五星紅旗を撤去した<sup>8</sup>。当時は「五星紅旗を戻すか否かは、選挙の結果を見て判断する」と述べていたが、同年1月の総統選挙で民進党の蔡英文が再選され、その後、covid-19の影響で中国からの客足が途絶えたことで五星紅旗は戻らず、現在は青天白日旗も姿を消している。



写真4 二つの国旗が立ち並ぶ模範街（筆者撮影）

## 金門島の郷土教育

2023年2月と2024年3月の2回、小学校で金門島の郷土教育の現場を観察する機会を得た。台

湾では、2019年度から「108課綱」と呼ばれる『十二年国民基本教育課程綱要』（日本の『学習指導要領』に相当）に基づく教育が実施されている。この新教育課程は、これまで別個に定められていた国民教育段階（国民小学と国民中学からなる9年間の義務教育）と後期中等教育段階（かつては普通教育の高級中学と技術職業教育の高級職業学校に大別されていたが、2014年度から制度上、複数の「型」＝タイプからなる高級中学に一元化された）のナショナル・カリキュラムを統合したものである。『国民中小学九年一貫課程綱要』（それ以前の『国民小学課程標準』と『国民中学課程標準』を統合したナショナル・カリキュラムで、2001年度から暫定版として、2004年度からは正式に実施された）の流れを引き継いで、国民小学段階から必修としての「国語文」と「英語文」に加え、選択必修として「本土語文」／「台湾手話」／「新住民語文」のいずれかを学ぶ複言語主義のカリキュラムとなっている。「108課綱」に至って、閩南語文、客家語文と原住民族語文（先住民族の諸言語）で構成されていた「本土語文」に馬祖島（連江県）に加え台湾島桃園市の一部地域でも話されている閩東語（馬祖語とも呼ばれる）が追加され、「台湾手話」と「新住民語文」（主に東南アジアからの移住者である「新住民」の諸言語）が新設された。カリキュラム開発における学校の役割が強化されていることも「108課綱」の特徴であり、教育部が定める全国基準としての「部定課程」の他に、各学校がその教育理念に照らし、学校・地域の教育資源を活用して独自に設計する「校訂課程」の枠が設けられた。

「校訂課程」のテーマは、ジェンダー平等、「族群」（台湾社会を構成するエスニック・グループ）の文化、人権、環境、防災など多岐にわたる。2回の視察の1回目は「芸術」の授業での探求型郷土学習と「閩南語」の授業、2回目は「校訂課程」

7 「反浸透法」について詳しくは、陳徳穎「台湾における偽情報の対策および現況」、『情報法制レポート』第4号、2023年、82-95頁を参照のこと。

8 「憂反滲透法 金門模範街五星紅旗不見了」、『中央社』、2020年1月2日、<<https://www.cna.com.tw/news/alog/202001020125.aspx>>。

の郷土文化の授業と「閩南語」の授業であった。

閩南語は、四つの「本土言語」の中で最も広く話されており、台湾島の学校では複数の出版社から出版されている検定教科書から選んで授業で使用するのが一般的だ（台湾では学校が教科書の採択権を持つ）。金門島では、金門島の閩南語は台湾島の閩南語とは別物であるとの意識が強い。写真5は、筆者が水頭聚落の黄輝煌洋楼で撮影した展示の音声ガイドだが、実際にはその中でも地域差がある台湾島の閩南語を「台語」とし、金門島の「閩南語」と明確に区別している。そのため、金門島では、県政府が独自に作成した『阮第開民宿』という教科書が使用されているが、その内容は地域の歴史、文化、生活に密着したものであり、言語教育と郷土教育の二つの意味を持つものとなっている。筆者が見学した授業も、言葉を学びながら地元のお菓子を実作したり、西園塩田の塩づくりについて知識を深めたりするなど、郷土教育の要素を多分に含むものであった。



写真5 黄輝煌洋楼の音声ガイド（筆者撮影）

「芸術」の授業では、探求型の郷土教育として、児童が身の回りで実際に目にする様々な伝統的意匠の意味が体系的に解説されていた。「校訂課程」の郷土文化の授業では、地元の廟の屋根や柱、壁などに施された意匠の意味が詳細に語られていた

が、授業の締めくくりに「私たちの使命」として、「誓死保衛郷土（死を誓って郷土を防衛する）」と「発揚金門精神（金門精神を発揚する）」という一対の標語の碑（尚義村に実際に存在する）の写真を見せ、熱っぽく児童に語りかける教師の姿が強く印象に残った。この標語は、金門島のあらゆる場所に今も残るかつての戦時標語を模したもののだが、日本の郷土教育の現場ではおよそ耳にすることがない強い言葉に、この島の人々の複雑な感情の一端を見た気がした。

## おわりに～台湾黒熊とカワウソ

写真6は「水獺（カワウソ）出没注意」の道路標識だが、金門島では、島の随所でカワウソのデザインを目にする。野生のカワウソの姿を実際に目にすることは極めてまれだが、金門島に生息するカワウソはユーラシアカワウソ（学名 *Lutra lutra chinensis*）という種類で、国際自然保護連合（IUCN）のレッドリストで準絶滅危惧に指定され、ワシントン条約付属書Iに記載されている。岡元らの研究によれば、中国大陸では過去50年で個体数が大幅に減少して南部ではほぼ絶滅、台湾島でも20年以上生息が確認されていないが、金門島には推定200頭以下の個体群が生き残っている<sup>9</sup>。家永



写真6 「カワウソ出没注意」の道路標識（筆者撮影）

9 岡元友実子、袁守立、林良恭、李佳、鐘立偉、安藤元一、木村順平「台湾金門島におけるユーラシアカワウソ (*Lutra lutra chinensis*) の生息状況および保全活動」、『日本野生動物医学学会誌』第26巻第1号、2021年、17-26頁を参照のこと。

は、「パンダと台湾黒熊」という論考で、2017年台北ユニバーシアードで人気を得た、台湾黒熊がモチーフの大会マスコットキャラクター「熊讚」について、「『台湾独立』や『中国統一』といった政治的主張に回収されることなく、ただ自分たちの代表が活躍した高揚感を仮託することができるシンボル」であるとし、ほかにも交通部観光署のマスコットキャラクター「オーベア」など、様々にキャラクター化される台湾黒熊は「台湾サイズの中華民国」を代表する「国民的」シンボルになりつつある存在であるとの見立てを示しているが<sup>10</sup>、果た

して、金門島におけるカワウソも、このような存在なのではないか。川島真は、1990年代以降の「金門学」の展開について、台湾における台湾学の展開、すなわち、従来の「中国」を中心とする諸学問、知識体系を「台湾人」「台湾主体性」を基軸に再編する過程の平行をなすものと捉えているが<sup>11</sup>、近年、金門島でカワウソが盛んにキャラクターに用いられていることも、「金門学」と同様、「中国」と「台湾」のはざままで独自性を持ちたいという、金門島の人々の思いの発露なのかもしれない。

10 家永真幸「パンダと台湾黒熊」、『UP』第541号、2017年11月、12-19頁。

11 川島真、前掲論文、44頁。